

「人の場所化」に関する日中対照研究

－「起点」「所有者」「動作主」－

鄭若曦

madlinecici@gmail.com

キーワード：場所化 人 起点 所有者 動作主

要旨

日本語も中国語も、「人」を単なる移動の物理的起点として言語化する場合、起点標識を用いるだけでなく、「のところ」「那儿（あそこ）」などを付加して「人」を場所化する必要がある。一方、「人」が取得動作の相手にあたる場合、日本語は「人」を場所化しないまま起点標識でマークすることを好むのに対して、中国語は「人」の場所化が必須である。本研究ではこのような「人」の場所化の有無が、両言語のそれぞれの構文の意味機能とどのような相関関係を持つかに焦点を当てて考察を行った。その結果、起点、所有者、動作主という三つの概念がしっかりとした意味拡張の基盤を持つことを踏まえた上で、「人」の場所化を必須とする中国語の構文は、「対象の移動」に焦点があり、「人」は専ら移動の起点として捉えられているのに対して、「人」の場所化しない日本語の構文は、「対象の所有関係の変化」または「主語への働きかけ」に焦点があり、「人」は所有者、または動作主として捉えられているという仮説を立て、それぞれの構文の守備範囲の違いを通して仮説の妥当性を検証した。

1. はじめに

日本語も中国語も、移動の起点¹が「人」である場合、「人」はそのままでは起点として言語化できないことが度々指摘されている（田窪 1984、荒川 1984）。例えば、日本語は（1a）（1b）が示すように、「花子」はそのままでは「から」と結びつくことができず、「のところ」などをつけて場所化される必要がある。中国語も（2a）（2b）の示すように、“花子”はそのままでは起点を表す前置詞“从”の目的語になることができず、“那儿（あそこ）”“这儿（ここ）”といった「場所化成分」が付加されてはじめて起点になれる²。

- (1) a. *太郎は花子から来た。
b. 太郎は花子のところから来た。

¹ 本研究で言う「移動」は「物理的な位置変化」、「起点」は「物理的な位置変化の起点」を指す。メタファー的な意味で「移動」「起点」という用語を使うことはない。「着点」「存在」と言う場合も同様である。

² 起点だけでなく、移動の着点が「人」の場合も、日本語と中国語は「人」を場所化する必要がある。

a. 太郎は*花子/花子のところにきました。 b. 太郎 来 *花子/花子 这儿 了。
太郎 来る 花子 花子 这儿 PERF

- (2) a. *太郎 从 花子 来了。
 太郎 FROM 花子 来る-PERF
- b. 太郎 从 花子 那儿 来了。
 太郎 FROM 花子 あそこ 来る-PERF

一方、「人」が移動の起点でありながら、「奪う」「取る」「買う」「借りる」といった「取得動作の相手」でもある場合、日本語と中国語では違いが見られる。両言語とも、「人」を起点標識の「から」と“从”でマークできるが、その際、中国語は(3)のように必ず「人」を場所化しなければならないのに対して、日本語は(4)のように「人」を場所化しないほうがむしろ自然である。以下、(3)のように[X_人][从-Y_人-場所化][V][Z]³という構造をとる中国語の文を『从-人-場所化』構文、(4)のように、[X_人-が][Y_人-から][Z-を][V]という構造をとる日本語の文を『人-から』構文と呼ぶことにする。

- (3) 『从-人-場所化』構文： [X_人][从-Y_人-場所化][V][Z]
- 太郎 从 花子 那儿 借了 一本书。
 太郎 FROM 花子 あそこ 借りる-PERF 一冊本

- (4) 『人-から』構文： [X_人-が][Y_人-から][Z-を][V]
- 太郎は 花子から 本を 借りた。

中国語では、日本語の『人-から』構文相当の構文は存在せず、「人」を起点標識“从”でマークしつつ、(5)のように「人」を場所化しない文は文法的に不適格である。一方、日本語は、中国語の『从-人-場所化』構文のように、「人」を場所化した(6)のような『人-場所化-から』構文も存在するが、述語動詞が取得動詞の場合にはほとんど使われず、中国語の『从-人-場所化』構文ほど出番は多くない。

- (5) *太郎 从 花子 借了 一本书。
 太郎 FROM 花子 借りる-PERF 一冊本
- (6) 『人-場所化-から』構文： [X_人-が][Y_人-場所化-から][Z-を][V]

太郎は 花子のところから 本を 借りた。

以上のことから、「奪う」「借りる」のような取得動詞を述語にとる場合に限って言えば、中国語の(3)の『从-人-場所化』構文と対応しているのは、日本語の(4)の『人-から』構文であり、両者は一見意味機能の違いがないように見える。しかし、『从-人-場所化』構文と『人-から』構文は常に(3)(4)の例文のように対応しているわけではなく、先行研

³ X_人とY_人は人名詞句、Zは名詞句一般、Vは対象の取得、及び対象の移動を表す動詞句を指す。

究である王 2009 の指摘する通り、両構文は許容できる取得動詞のタイプが異なっており（2 節参照）、守備範囲がかなり異なる。また、5.1 節で指摘するように、取得動詞以外の動詞（対象の物理的移動のみを表し、対象の取得まで含意しない他動詞・複合動詞）にも視野を広げると、両構文の守備範囲の違いは更に目立つ。

本研究では、中国語の『从-人-場所化』構文と日本語の『人-から』構文は、決して意味機能が同じではなく、「人」の場所化の有無は、両構文の意味機能の違いにも反映されていると主張する。具体的には、「人」を場所化する中国語の『从-人-場所化』構文は専ら「人」を移動の起点として捉えているのに対して、「人」を場所化しない日本語の『人-から』構文は「人」を移動の起点としてではなく、「所有者⁴」または「動作主⁵」として捉えているとし、両構文の守備範囲の違いも、このように考えることで過不足なく説明できることを見ていきたい。また、「人」を場所化する日本語の『人-場所化-から』構文は、中国語の『从-人-場所化』構文と同じく「人」を移動の起点として捉える構文だと考えるが、『从-人-場所化』構文より圧倒的に出番が少ないことから、同一の事態の「人」に対する両言語の話者の捉え方の違いが伺えることも指摘していきたい⁶。

2. 先行研究

王 2009 は、述語動詞が取得動詞の場合に、『从-人-場所化』構文と『人-から』構文の守備範囲の違いが見られることを指摘した上で、文全体の他動性の強弱という観点から両構文を特徴付けることを試みた。

王 2009 によれば、『从-人-場所化』構文と『人-から』構文の守備範囲が重なるのは、「奪う」「盗む」「借りる」「買う」をはじめ、他動性が高い取得動詞の場合であり、守備範囲が重ならないのは「預かる」「受け取る」「受ける」など、他動性が低い取得動詞の場合である。例えば、“保管（預かる）”の場合、『从-人-場所化』構文を用いた（7b）は不自然であり、文を自然にするためには、（8）の“邻居的钥匙（隣の人の鍵）”のように「隣の人」を属格として、または（9）のように「隣の人」を主語として表現する必要がある⁷。

⁴ 本研究で言う「所有者」は、狭義の所有者（モノを自由に使用・処分する権利を持つ人）だけではなく、モノの（一時的）管理者、保管者、利用者も含めて広い意味で使う。「所有」「所有関係」「所有権」と言う場合も同様である。狭義の意味での「所有」を指す場合は、その都度言及する。

⁵ 本研究で言う「動作主」は、「太郎は花子から同意を得た」のように、Y_A自身が「同意」という行為の動作主の場合だけでなく、「太郎は花子から鍵を預かった」のように、Y_Aは「預かる」の動作主でないが、「預かる」時には「預ける」人がいるという意味で、Y_Aが潜在的に「預ける」の動作主である場合も含む。

⁶ 『人-場所化-から』構文の場所化成分「ところ」は、「(花子の) 家、会社」といった具体的な場所を指しており、「(花子の) いる空間」を漠然と指すことはほとんどない。対照的に、中国語の『从-人-場所化』構文における“那儿（あそこ）”などの場所化成分は、「(花子の) いる空間」を漠然と指すのに問題なく使える。このような日中の場所化成分の意味の具体性の程度の違いも、『人-場所化-から』と『从-人-場所化』構文の守備範囲の違いを動機づける要因であると思われるが、この点に関しては今後の課題にしたい。

⁷ （8）のように「隣の人」を属格にする場合、「隣の人」は「鍵」の狭義の所有者である。一方、（9）のように「隣の人」を主語にして表現する場合、「隣の人」は必ず「預ける」という動作の動作主であるが、「鍵」の狭義の所有者である必要は必ずしもない。

- (7) a. 太郎は隣の人から鍵を預かった。
 b. *太郎 从 邻居 那儿 保管了 钥匙。
 太郎 FROM 隣の人 あそこ 預かる-PERF 鍵
- (8) 太郎 保管了 邻居的 钥匙。
 太郎 預かる-PERF 隣の人の 鍵
 太郎は隣の人の鍵を預かった。
- (9) 邻居 把 钥匙 保管 在 太郎 那儿 了。
 隣の人 PM⁸ 鍵 預ける ～に 太郎 あそこ PERF
 隣の人は鍵を太郎に預けた。

また、取得動詞の他動性が低くないにもかかわらず、両構文の守備範囲が重ならない場合に関しても、Hopper&Thompson1980の言う他動性の他のパラメーター（例えば、「個性性(individuation)」）が欠けているため、文全体の他動性が低いのだと説明している。例えば、「借りる」は他動性が低くないが、(10b)の示すように中国語は『从-人-場所化』構文が不自然であり、(11)のように“他的想法(彼のアイデア)”というふうに「彼」を属格にして表現する必要がある。王2009は“想法(アイデア)”は際立ちの低い抽象物で、個性性が低いため、述語動詞の他動性が高くても、文全体の他動性が低いから、『从-人-場所化』構文と合わないのだと説明している。

- (10) a. 彼からアイデアを借りて、新しい案を作った。
 b. *从 他 那儿 借 想法, 作了 新 方案。
 FROM 彼 あそこ 借りる アイディア 作る-PERF 新しい案
- (11) 借 他的 想法, 作了 新 方案。
 借りる 彼の アイディア 作る-PERF 新しい案
 彼のアイデアを借りて、新しい案を作った。

以上のことから、王2009は、『人-から』構文は文全体の他動性の強弱と関係なく成立するのに対して、『从-人-場所化』構文の使用は文全体の他動性が高い場合に制限されていると主張した。両構文の守備範囲の違いに関する王2009の指摘は正しいと思われるが、いくつかの問題点があると思われる。

まず、王2009では、『从-人-場所化』構文と『人-から』構文の守備範囲の違いを決めるのは、文全体の他動性の強弱だというふうに一般化を図っているが、なぜ文の他動性が高いと『从-人-場所化』構文が使いやすいのかについての説明がない。4節と5節で指摘するように、他動性の強弱による一般化は、本研究で提示するより説明力の高い一般化に収斂されるものである。また、王2009では、日本語の『人-場所化-から』構文を考察範囲に入

⁸ 本研究では、“PM”を Patient Marker、“AM”を Agent Marker の略号として使う。

れていなく、述語動詞も取得動詞のみを扱っているが、本研究では、専ら対象の移動を表し、対象の取得まで含意しない他動詞・複合動詞も含めて考察することで、それぞれの構文の守備範囲、及び意味機能をより明らかにすることを目指す。

以下、3節で本研究の仮説を提示し、4節と5節で仮説の妥当性を検証し、文の他動性の強弱による先行研究の説明よりも、本研究の一般化のほうがより説明力が高いことを示していきたい。

3. 本研究の仮説

- ①『从-人-場所化』構文： [X_人][从-Y_人-場所化][V][Z]
 『人-場所化-から』構文： [X_人-が][Y_人-場所化-から][Z-を][V]
- 対象ZをY_人からX_人へ移動させることを表す。
 対象Zの移動に焦点がある。Y_人はZの移動の起点である。
- ②『人-から』構文： [X_人-が][Y_人-から][Z-を][V]
- 以下の二種類の意味を表し得る。両者は排他的ではない。
- (1) 対象Zの所有権がY_人からX_人へ移ることを表す。
 対象Zの所有関係の変化に焦点がある。
 Y_人は対象Zの(元)所有者である。
- (2) X_人がY_人による働きかけを受けることを表す。
 (Y_人からX_人への)働きかけに焦点がある。
 Y_人は行為を発する動作主である。

もし上記の仮説が正しければ、以下のことが予想される。5節で順に確認していきたい。

- I Y_人=起点：
 『人-から』構文が使いにくい。
- II Y_人=起点+ (元)所有者 /⁹動作主：
 どちらの構文も使える。
- III Y_人= (元)所有者 / 動作主：
 『从-人-場所化』構文と『人-場所化-から』構文が使いにくい。

上記の仮説は、「日本語の『人-から』構文はなぜY_人を場所化しないのか」という問いに対して、「Y_人は(元)所有者、または動作主だからだ」と答えることになる。ただ、仮にI

⁹ “/”は、Y_人が(元)所有者と動作主のどちらか一方である、または両方であることを意味する。

からⅢが全て成立したとしても、「Ⅲ¹⁰のように、移動が読み取れず、Y_人が専ら（元）所有者、または動作主の場合でも、なぜ日本語は起点標識「から」が使えるのか」という問いに答えられていない。よって、4節ではまず、「所有関係の変化は移動である」「行為は移動である」という二つのメタファーがその意味拡張の基盤として働いていることを確認したい。

4. 「起点」から「所有者」「動作主」への意味拡張の原理

4.1 「起点」から「所有者」への意味拡張

なぜ起点標識で所有関係が変化する前の所有者を表せるのかについては、〈移動〉と〈所有関係の変化〉という二つの事態がメタフォリカルな関係にあるからだというのが本研究の答えであるが、その前にまず、〈存在〉と〈所有〉もメタフォリカルな関係にあることに触れておきたい。

〈存在〉と〈所有〉がメタフォリカルな関係にあることには、人間があるモノと空間的
近接関係にある場合、人間は同時にそのモノの所有者でもあることが多いという経験的基盤があると言えよう。また、言語事実としても、(12) (13) の日本語・中国語のように、〈存在〉と〈所有〉は多くの言語で同じ言語形式で表されている。

(12) a. 机に本がある。 〈存在〉

 b. 私には3人の娘がいる。 〈所有〉

(13) a. 桌子上 有 一 本 书。 〈存在〉

 机-上 有 一 册 本

 b. 我 有 三 个 女 儿。 〈所有〉

 私 有 三 人 娘

〈存在〉と〈所有〉は静的な状態の場合であったが、動的な変化に関わる〈移動〉と〈所有関係の変化〉についても上記の分析が当てはまる。このことに関しては、早くも池上1981によって、〈存在〉と〈所有〉、〈移動〉と〈所有関係の変化〉は深層的にも表層的にも同じ構造を持ち得ることが指摘されている。

まず、言語事実として、池上1981が挙げた英語の例(14)のように、所有関係が変化する前の所有者が移動の起点標識 from でマークされることがある。日本語は所有の変化を表すのに、英語のように移動動詞「行く」を用いることは基本的でないが、(15)の「離れる」のように、移動とともに両者の所有関係の解消をも含意する動詞の場合なら「から」で所有者としての「親」をマークできる。一方、中国語にも「離れる」と意味が似た“离开”があるが、起点標識“从”を使うためには(16a)のように「親」を場所化しなければなら

¹⁰ 5節でまた詳しく例を挙げるが、当面は、Ⅲにあたる例として、「太郎は花子から幸せを奪った」「太郎は花子から同意を得た」のような例を考えていただければ良い。

ず、それだけ空間義が強く、所有関係の解消という意味が弱い¹¹。所有関係の解消という意味を前面に出したい場合は、(16b)のように「親」を（場所化せずに）“离开”の直接目的語にする。

(14) All his money is gone from him.

(15) 大きくなれば子供は親から離れていく。

(16) a. 我 16 岁 就 从 父母 身边 离开了。

私 16 歳 既に FROM 親 そば 離れる-PERF

私は 16 歳で親のそばから離れた。

b. 我 16 岁 就 离开了 父母。

私 16 歳 既に 離れる-PERF 親

私は 16 歳で親を離れた。

次に、「所有関係の変化は移動である」というメタファーには、モノが人から人へ移動すると同時に、そのモノの所有権も人から人へ変化していることが多いという経験的基盤があると言えよう。また、図 1 が示すように、＜移動＞は＜所有関係の変化＞と構造的類似性が多く見られる。具体的には、所有関係の変化前の所有者が「起点」に相当し、所有関係の変化後の所有者が「着点」に相当し、そして「移動体」としての「所有物」が、前者（の支配域）から後（の支配域）へ移るといふ具合で、＜移動＞と＜所有関係の変化＞が写像関係にあるということである。

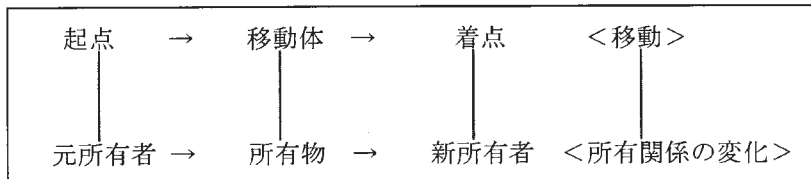


図 1 <移動>と<所有関係の変化>の対応関係

よって、日本語が起点標識「から」で（元）所有者を表し得ることには、上記のような十分な心理的基盤があることがわかった。ただ、このような意味拡張は、どのような起点標識にも強制的に起こるわけではなく、実際、中国語の“从”は上記の方向では拡張せず、5 節でこれから示すように、ただ所有関係が変化するだけで、対象の移動がない場合には『从-人-場所化』構文は不適格である。

¹¹ 移動動詞「来る」の場合も、移動物が「手紙」「プレゼント」のように、移動とともに所有関係の変化が起こることが想定しやすいモノの場合、「父から手紙が来た」のように「父」を場所化せずに言うことができる。中国語もその場合“从”を用いた自動詞文が使えるが、「父」はやはり場所化が必須である。

4.2. 「起点」から「動作主」への意味拡張

なぜ起点標識で動作主を表し得るのかについても、＜移動＞と＜行為＞という二つの事態がメタフォリカルな関係にあるからだというのが本研究の答えである。

まず、言語事実として日本語の「から」にはそもそも動作主用法があり、通言語的にも動作主を起点標識でマークする現象が多く見られる。例えば、池上 1981 は、日本語の「から」も含め、ラテン語の *ab*、ドイツ語の *von*、フランス語の *de* など、多くの言語で受動態の動作主表示は起点的なものであることを指摘している。一方、中国語の“从”は (17b) (18b) (19b) の示すように、何れの動作主用法も持たない。

(17) a. 私から彼女を推薦します。＜他動詞文の動作主＞

b. *从 我 这儿 推荐 她。

FROM 私 ここ 推薦する 彼女

c. 我 来 推荐 她。

私 意志 (助動詞) 推薦する 彼女

私が彼女を推薦します。

(18) a. 彼から推薦されました。＜受身文の動作主＞

b. *我 从 他 那儿 推荐了。

私 FROM 彼 あそこ 推薦する-PERF

c. 我 被 他 推荐了。

私 AM 彼 推薦する-PERF

私は彼に推薦されました。

(19) a. 彼から電話がきました。＜自動詞文の動作主＞

b. ?从 他 那儿 来了 一个 电话。

FROM 彼 あそこ 来る-PERF 一つ 電話

c. 他 打来了 一个 电话。

彼 掛ける-来る-PERF 一つ 電話

彼は電話を掛けてきた。

「行為は移動である」というメタファーは、認知言語学でメタファーによる意味拡張を説明する時に最もよく取り上げられる例の一つである (Lakoff&Johnson1980、靱山 2014)。そこには、我々は一定の経路を辿って移動することが、同時にある行為を成し遂げることでもあることが多い、という経験的基盤がある。また、＜移動＞と＜行為＞の間に、我々は構造的類似性を様々な面で見出すことができる。具体的には、池上 1994 の説明のように、行為を発する場としての「動作主」が「起点」に相当し、行為の届く場としての「被動体」が「着点」に相当し、そして前者から後者へと「移動体」としての「行為」が流れるという具合で、＜移動＞と＜行為＞が写像関係にあるということである。

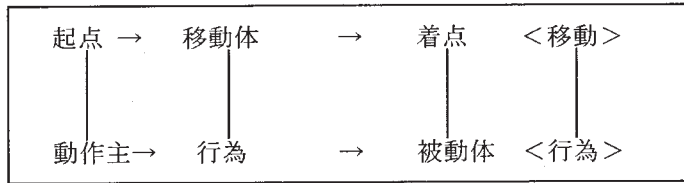


図2 <移動>と<行為>の対応関係

よって、日本語の「から」が動作主を表し得ることには、上記のような十分な心理的基盤があると言えよう。ただ、このような意味拡張は、どのような起点標識にも強制的に起こるわけではなく、実際、中国語の“从”は上記の方向では意味拡張せず、5節で述べるように、単に Y_A による働きかけがあるだけで、物理的な移動がない場合には『从-人-場所化』構文は使えない。

王 2009 にも、 Y_A の動作主性の強弱について指摘しているところがあるが、あくまでも文全体の他動性の強弱を判断する根拠の一つとして見ているに過ぎない。王 2009 が『从-人-場所化』構文の使用が文全体の他動性が高い場合に制限されていると主張していることからわかるように、基本的には受け手である X_A の動作主性の強弱から構文の特徴を捉えようとしている。例えば、(7b)のように、『从-人-場所化』構文が「預かる」の場合に使えないのは、受け手の X_A に全く動作主性がないのに対して鍵を預ける Y_A は動作主性が高いため、文全体の意味が受動的で他動性が低く、よって他動性の高い『从-人-場所化』構文と合わないのだと説明している。また、王 2009 は(18)(19)のような動作主用法についても触れているが、これらに“从”が使えないのも、 Y_A が動作主だからだというよりも、受動文・自動詞文は文全体が受動的で他動性が低いから“从”と合わないのだという説明になっている¹²。しかし、そもそもなぜ“从”と他動性の低い文は相性が悪く、「から」は文の他動性の強弱にかかわらず使えるのかについての説明がない。

本研究では、ここまで見てきた三つの構文の違いを、主語の X_A の立場から文の他動性の強弱で一般化を図るよりも、それぞれの構文における Y_A が、ここまで述べてきたようなしつかりとした意味拡張の基盤を持つ起点、所有者、動作主という三つの意味をどこまで表せるかを手掛かりに、両構文の意味の焦点が「対象の移動」なのか、それとも「対象の所有関係の変化」または「(Y_A から X_A への)働きかけ」なのかというふうに一般化を図った方が妥当性が高いと考える。以下、5節では、 Y_A と起点、所有者、動作主の可能な対応関係を全て考察し、3節で提示した仮説とその帰結であるⅠからⅢの妥当性を検証したい。

¹² 王 2009 を読む限り、(18b)(19b)の不成立の要因に関しては、①文全体の他動性が低いことと、②“从”が動作主を導けないことの両方を認めており、且つ他動詞文の(17b)の不成立の要因は主に②にあると指摘しているにもかかわらず、(7b)のような『从-人-場所化』構文の不成立の要因は①にあると述べている。よって、王 2009 の図式では、(7b)と(17b)(18b)(19b)を統一的に説明できないという問題がある。

5. 「人の場所化」と「起点」「所有者」「動作主」

5.1 Y_A = 「起点」 (= I の検証)

述語動詞が「運ぶ」「送る」「持ってくる」「連れていく」のように、専ら対象の移動を表し、対象の所有関係の変化を含意しない他動詞・複合動詞の場合、 Y_A は対象の所有者としても、何かの動作を積極的に行う動作主としても読み取れず、専ら対象の移動の起点である。この場合、日本語は興味深いことに、(20) (22) の示すように、『人-から』構文が使えず、『人-場所化-から』構文を用いる必要がある。一方、中国語は、(21) (23) のように、『从-人-場所化』構文が問題なく使える。このように、 Y_A が専ら移動の起点である場合に『人-から』構文が使えないことは、本研究の仮説から導かれた帰結 I が真であることを意味していると言えよう。

- (20) a. *私は婆さんから布巾を持ってきた。
 b. 私は婆さんのところから布巾を持ってきた。
- (21) 我 从 婆婆 那儿 拿来了 一块 抹布。
 私 FROM 婆さん あそこ 持つ-来る-PERF 一枚 布巾
- (22) a. *王さんは李さんから連れて行かれた。
 b. 王さんは李さんのところから連れて行かれた。
- (23) 小王 被 从 小李 身边 带走了。
 王さん AM FROM 李さん そば 連れる-去る-PERF

ただ、一見例外に見えるのが、(24) の「離す」である。「離す」も対象の移動を表す動詞だと言えるが、 Y_A を場所化しない『人-から』構文しか使えない。しかし、これは(15)の「離れる」と同様、「離す」には対象との所有関係の解消が含意されているためであって、 Y_A を場所化しないのは「から」がマークしているのは移動の起点でなく、対象の(元)所有者だからである。中国語は「離す」に対応する経路融合の使役移動動詞がなく、(23)と同じように“带走(連れ去る)”で表現するが、“带走(連れ去る)”は所有関係の変化まで含意しないため、やはり Y_A を場所化し『从-人-場所化』構文が用いられる。

- (24) 親から離されて施設に預けられた子供です。
- (25) 这 是 被 从 父母 身边 带走 的 孩子。
 これ である AM FROM 親 そば 連れる-去る の 子供

5.2 Y_A = 「起点」+「(元)所有者」/「動作主」 (= II の検証)

5.2.1 「奪う」「盗む」「借りる」「買う」

述語動詞が「奪う」「盗む」「取る」「掏(す)る」「さらう」、または「買う」「借りる」のような取得動詞で、取得対象が具体物の場合、冒頭の(3)(4)(6)や、以下の(26)(27)が示すように、基本的にはどちらの構文も用いることができる。

- (26) a. 太郎は花子から大金を盗んだ。
 b. 太郎は花子のところから大金を盗んだ。

- (27) 太郎 从 花子 那儿 偷走了 很多 钱。
 太郎 FROM 花子 あそこ 盗む-去る-PERF たくさん お金

これらの取得動詞には、対象の所有関係の変化が意味に組み込まれているため、 Y_A は常に対象の(元)所有者である。また、これらの取得動詞で、対象が具体物の場合、現実には取得動作の実行に伴って対象も知覚可能な形で移動をしていることが圧倒的に多く、その際 Y_A は移動の起点だと言ってよい。一方、 Y_A の動作主性に関しては、「奪う」「盗む」の場合、 X_A は強引に Y_A から対象を奪い取り、 Y_A には対象をあげようという意志が全くないのが普通であるため、 Y_A は動作主ではないのに対して、「買う」「借りる」の場合、 X_A が Y_A に対して「買う」「借りる」という行為を行うと同時に、通常 Y_A も「貸す」「売る」という行為を行うため、 Y_A は動作主であることが多いと言える。ただ、「買う」「借りる」の Y_A が動作主でないこともあることに注意が必要である¹³。

このように、述語動詞が「奪う」「盗む」「買う」「借りる」などの取得動詞で、且つ取得対象が具体物の場合、 Y_A は移動の起点であり、且つ取得対象の(元)所有者、または動作主である。(26) (27) と (3) (4) (6) の示すように、三つの構文とも使えるため、本研究の仮説から導かれた帰結Ⅱが真であることが示唆されている。

ただ、冒頭でも触れたように、三つの構文は全く同じように好まれて使われているわけではない。『从-人-場所化』構文を用いる中国語は、 Y_A を移動の起点として捉えることに何一つ不自然を感じないのに対して、日本語は『人-場所化-から』構文よりも、圧倒的に『人-から』構文の方を好むため、 Y_A を移動の起点としてよりも、(元)所有者、または動作主として捉えることを好むと言えよう。もちろん、中国語も Y_A を属格にしたり、文の主語にしたりすることで、 Y_A の所有者、または動作主としての性格を引き出すことは可能だが、肝心なのは、それらと『从-人-場所化』構文との間には、「好まれ度」の差はなく、 Y_A を移動の起点として表現しても全く自然であるということである。

よって、述語動詞が「盗む」「借りる」などの取得動詞で、対象が具体物の場合、 Y_A は起点であると同時に、(元)所有者、または動作主であるが、中国語は Y_A を起点として捉えることに全く抵抗がないのに対して、日本語は Y_A を起点として捉えることに抵抗があり、(元)所有者、または動作主として捉えることをより好むというふうに、両言語の話者の間で捉え方の違いが見られると言えよう。

また、帰結Ⅱから見て、一見例外に見える例もある。述語動詞は同じく「奪う」「借りる」のような取得動詞でありながら、取得対象が「幸せ」「アイディア」のような抽象物の場合、

¹³ Pinker1994 が指摘するように、何かを「買う」「借りる」場合には、必ずしも「売る」「貸す」人がいるわけではない。例えば、 X_A は Y_A の許可なしに、勝手に対象を「借りる」ことができる。

『从-人-場所化』構文と『人-場所化-から』構文は不適格となる。このような現象が本研究の観点から見れば特に反例ではないことを 5.3.1 節で見ていきたい。

5.2.2 「預かる」「受け取る」「もらう」

述語動詞が「預かる」「受け取る」「もらう」のような取得動詞で、取得対象が具体物の場合、(7) と (28) が示すように、『人-から』構文は問題なく使用できるのに対して、『从-人-場所化』構文と『人-場所化-から』構文は不適格である。

(7) a. 太郎は隣の人から鍵を預かった。

b. *太郎 从 邻居 那儿 保管了 钥匙。

太郎 FROM 隣の人 あそこ 預かる-PERF 鍵

(28) *太郎は隣の人のところから鍵を預かった。

これらの取得動詞には、対象の所有関係の変化が意味に組み込まれているため、Y_人は常に対象の(元)所有者である。また、これらの取得動詞で、対象が具体物の場合、対象の取得と同時に対象も知覚可能な形で移動していることが多く、その際 Y_人は移動の起点だと言ってよい。また、「預かる」とときには「預ける」人がいて、「受け取る」とときには「あげる」人がいるという意味で、Y_人は動作主であることにも異論はないと思われる。よって述語動詞が「受け取る」「預かる」「もらう」で、対象が具体物の場合、5.2.1 節の「借りる」「盗む」と同様、Y_人は典型的には起点であり、且つ(元)所有者、または動作主である。にもかかわらず、『从-人-場所化』構文と『人-場所化-から』構文を用いることができないのは如何なる理由によるのか。

王 2009 では、「預かる」「受け取る」などの取得動詞は、「盗む」「借りる」より他動性が低く、よって他動性の高い『从-人-場所化』構文と合わないのだと説明されている。しかし、これではやはり『从-人-場所化』構文がなぜ他動性が高い場合でないといけないのかという問題が残る。本研究では、述語動詞が「預かる」「受け取る」「もらう」のような取得動詞の場合に、『从-人-場所化』構文と『人-場所化-から』構文を用いることができない理由に関して、以下のように考える。

まず、日本語の『人-場所化-から』構文が(28)のように使えないのは、「預かる」「受け取る」「もらう」を述語動詞にとる場合、Y_人は必ず動作主でなければならないことと関係が深いと考える。これは、「盗む」「奪う」の Y_人が動作主でないことや、「借りる」「買う」の Y_人が必ずしも動作主でないことと対照的である。動作主としての「人」は、起点としての「人」よりも、明らかに認知的に際立っているため、日本語ではそのような動作主としての Y_人を敢えて背景化して起点として捉えるのに抵抗を感じるのだということである。

一方、中国語の『从-人-場所化』構文が(7b)のように使えないのは、中国語のこれらの取得動詞が、厳密には日本語の「預かる」「受け取る」「もらう」と意味スコープが異な

るからだと考える。例えば、(7b)では「預かる」に対応する中国語の動詞が“保管”となっているが、中国語の“保管”は、(29b)が言えることからわかるように、「預ける」人が実際にいなくても使えるため、「預かる」とは実は意味が異なると言えよう。

- (29) a. *お巡りさんが地面に落ちている財布を預かった。
 b. 警察 保管了 掉 在 地上 的 钱包。
 警察 預かる-PERF 落ちる ～に 地面-上 の 財布

即ち、中国語の“保管”は、「預かる」と違って、対象を誰かが預けることが、動詞の意味のスコープに入っていないのである。同様のことは、「受け取る」「もらう」に大まかに対応するとされる中国語の“收到”についても言える。対象を誰かが預ける、またはあげることが意味のスコープに入っていない以上、当然預ける、またはあげることによって、対象が移動するという移動のプロセスも、“保管”や“收到”の意味スコープに入っていない。“保管”や“收到”が『从-人-場所化』構文と合わないのは、正にこのような理由によると考える。

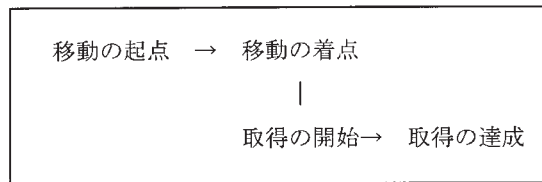


図3 対象の移動と“保管”“收到”の意味スコープのズレ

以上の分析から、述語動詞が「預かる」「受け取る」のような取得動詞の場合の日本語の『人-場所化-から』構文の不適合は、認知的に際立った動作主であるY_人を取って起点として表現することの不自然さによる。一方、中国語の『从-人-場所化』構文の不適合は、“保管”“收到”が日本語の「預かる」「受け取る」と違って、対象の移動プロセスが動詞の意味スコープに入っていないことによることがわかった。

この節で見てきた現象は、帰結Ⅱからしては反例に見えるかもしれないが、『从-人-場所化』構文と『人-場所化-から』構文は「対象の移動」に焦点がある構文だという本研究の仮説から見れば、別段不思議なことではない。両構文は共に「対象の移動」に焦点があり、Y_人を起点として捉える構文である以上、述語動詞はそのような移動プロセスを収めるだけの意味スコープを持つ必要があり、またY_人も起点として認識できるだけの際立ちの低さを持つ必要がある。“保管”“收到”や「預かる」「受け取る」は上記のことを満たさないため、必然的に『从-人-場所化』構文や『人-場所化-から』構文と合わないのだということである。

5.3 Y_人 = 「(元)所有者」 / 「動作主」 (=Ⅲの検証)

5.3.1 「奪う」「盗む」「借りる」「買う」 + 「抽象物」

5.2.1 節や 2 節の (10) (11) で述べたように、述語動詞が「奪う」「借りる」のような取得動詞で、且つ取得対象が「幸せ」「アイディア」のような抽象物の場合、『人-から』構文は問題なく使えるのに対して、『从-人-場所化』構文と『人-場所化-から』構文は使えない。中国語は、(11) の“他的想法 (彼のアイディア)” や (31) の“花子的幸福 (花子の幸せ)” のように、Y_人 を属格にして表現する必要がある。

- (30) a. 太郎は花子から幸せを奪った。
 b. *太郎は花子のところから幸せを奪った。
 c. *太郎 从 花子 那儿 夺走了 幸福。
 太郎 FROM 花子 あそこ 奪う-去る-PERF 幸せ

- (31) 太郎 夺走了 花子 的 幸福。
 太郎 奪う-去る-PERF 花子 の 幸せ
 太郎は花子の幸せを奪った。

このような言語事実については王 2009 も指摘があるが、王 2009 では、取得対象が抽象物の場合は、Hopper&Thompson1980 の言う他動性のパラメーターのうち、「個性性 (individuation)」が低く、文全体の他動性が低いから、他動性の高い『人-場所化-から』構文と相性が悪いのだと説明している。しかし、なぜ『从-人-場所化』構文は他動性が高くないかについての説明がない。

一方、本研究のように、『从-人-場所化』構文と『人-場所化-から』構文は専ら「対象の移動」に焦点があるが、『人-から』構文は「対象の所有関係の変化」、及び「(Y_人から X_人への) 働きかけ」に焦点があることと自然に説明ができる。『从-人-場所化』構文と『人-場所化-から』構文が、抽象物との相性が悪いのは、物理的移動の場合、移動物は当然具体的で、有界的な (輪郭がはっきりしている) モノが望ましいが、「アイディア」のような抽象物は、具体性も有界性も欠けているため、移動物として捉えにくいからである。一方、『人-から』構文が問題なく使えるのは、Y_人 が対象の (元) 所有者、または動作主であるからであり、移動の起点として読み取れなくても特に問題はないということである。

以上、述語動詞が「奪う」「借りる」のような取得動詞で、且つ取得対象が抽象物の場合、Y_人 は移動の起点として読み取れず、専ら対象の (元) 所有者、または動作主である。その場合、『从-人-場所化』構文と『人-場所化-から』構文が不適格であることから、本研究の仮説から導かれた帰結Ⅲが真であることが示唆される。

5.3.2 「教わる」「習う」「聞く」

述語動詞が「教わる」「習う」「聞く」のような動詞の場合、(32) (33) の示すように、『从

-人-場所化』構文と『人-場所化-から』構文は使えず、専ら『人-から』構文が使われる。中国語は (33b) のように、「田中先生」を受身文の動作主として表現するしかない。

- (32) a. 私は田中先生から英語を習った。
 b. *私は田中先生のところから英語を習った。
- (33) a. *我 从 田中老师 那儿 学了 英语
 私 FROM 田中先生 あそこ 習う-PERF 英語
 b. 我 被 田中老师 教了 英语。
 私 AM 田中先生 教える-PERF 英語
 私は田中先生に英語を教えてもらった。

これらの動詞を述語にとる場合、対象は常に知識や情報のような抽象物である。よって、移動は読み取れず、Y_人は移動の起点ではない。また、「私は田中先生の英語を習った」が言えないように、「英語」が「田中先生」の所有物だとも言い難い¹⁴。よって、Y_人は(元)所有者とは言い難い。しかし、「教わる」「習う」には「教える」人がいる、「聞く」には「話す」人がいるという意味で、Y_人は動作主性を持つと言えよう。よって、述語動詞が「教わる」「習う」「聞く」の場合、Y_人は専ら動作主であり、その場合に『从-人-場所化』構文と『人-場所化-から』構文が不適格であることから、帰結Ⅲが真であることが示唆される。

王 2009 もこれらの動詞の場合は『从-人-場所化』構文が使えないことを指摘しているが、それは「教わる」「習う」「聞く」が「盗む」「借りる」などより他動性が低く、他動性の高い『从-人-場所化』構文と合わないからだと説明している。しかし、これではやはり『从-人-場所化』構文がなぜ他動性が高い場合でないといけないう問題が残る。一方、本研究では、『从-人-場所化』構文と『人-場所化-から』構文は、専ら Y_人を移動の起点として捉えるため、移動が読み取れないこれらの動詞とは当然相性が悪いのだと説明できる。

ただ、王 2009 は (34) のように、「英語」に数量表現を付けると、『从-人-場所化』構文は許容度が上がるという現象を指摘している。しかし、王 2009 はやはりこのことを文の他動性の強弱と結びつけて説明しようとしている。即ち、数量表現を付けることにより、対象の「個性性」が増し、文全体の他動性が増すため、他動性の高い『从-人-場所化』構文との相性がよくなったのだという説明である。しかし、これではやはりこれまで述べてきた問題が残ったままである。

- (34) 我 从 田中老师 那儿 学了 一句 英语。
 私 FROM 田中先生 あそこ 習う-PERF 一文 英語
 私は田中先生から英語をワンセンテンス習った。

¹⁴ ただ、Y_人が所有者として解釈できる場合も存在する。例えば、「英語」ではなく、「太郎は花子から秘訣を習った」なら、「太郎は花子の秘訣を習った」にしても特に不自然ではない。

一方、上記の現象は、本研究のように『从-人-場所化』構文を専ら「対象の移動」に焦点を当てる表現だと考えることで、自然に説明ができる。物理的移動の場合、移動物は当然具体性・有界性を持つものであることが望ましい。知識や情報は、具体性も有界性も欠けているため、一般的には移動物として相応しくないが、数量表現をつけることで臨時的に具体性・有界性を獲得することで、『从-人-場所化』構文と相性がよくなったのだと考えられる¹⁵。

5.3.3 「同意を得る」「虐待を受ける」

述語動詞が「得る」「受ける」のような取得動詞で、取得対象が「同意」「虐待」のような行為である場合、(35)の示すように、『人-から』構文は問題なく用いることができるが、『从-人-場所化』構文と『人-場所化-から』構文は不適格である。中国語は(36)のようにY_Aを受身文の動作主として表現するしかない。

- (35) a. 太郎は親から虐待を受けた。
 b. *太郎は親のところから虐待を受けた。
 c. *太郎 从 父母 那儿 受到了 虐待。
 太郎 FROM 親 あそこ 受ける-PERF 虐待

- (36) 太郎 被 父母 虐待了。
 太郎 AM 親 虐待-PERF
 太郎は親に虐待された。

取得対象が「同意」「虐待」のような行為であるため、当然移動は読み取れず、Y_Aは移動の起点ではない。また、「同意」「虐待」といった行為は、人が使用・管理・処分できるモノという普通の意味での所有物とも考えにくいため、Y_Aは所有者ではないと言ってよい¹⁶。一方、「同意」「批判」は行為そのものであるため、Y_Aは当然動作主である。

よって、述語動詞が「得る」「受ける」のような取得動詞で、取得対象が「同意」「虐待」のような行為である場合、Y_Aは単なる動作主である。『从-人-場所化』構文と『人-場所化-から』構文が不適格であることから、帰結Ⅲが真であることが示唆される。

王2009もこれらの動詞の場合は『从-人-場所化』構文が使えないことを指摘しているが、それは「受ける」「得る」が「奪う」「盗む」「借りる」「買う」より他動性が低く、他動性の高い『从-人-場所化』構文と合わないからだとしている。しかし、これではやはり例の問題が残る。一方、本研究なら、『从-人-場所化』構文と『人-場所化-から』構文は専らY_Aを移動の起点として捉えるが、『人-から』構文はY_Aを「動作主」として捉えること

¹⁵ 日本語の『人-場所化-から』構文にはこのような柔軟性はない。

¹⁶ 「太郎は父から同意を得た」は、「太郎は父の同意を得た」と言うこともできるが、その場合の「父」を所有者として認めるかは今後の課題としたい。

もできるため、『人-から』構文が使用可能で、『从-人-場所化』構文と『人-場所化-から』構文が不適格なのだと説明できる。

以上、3節で提示した仮説から導かれたⅠからⅢの帰結が、5.2.2節の「預かる」「受け取る」を除いて全て真であることが確認できた。また、「預かる」「受け取る」に関しても、本発表の提示した仮説から自然に説明できると論じた。よって、『从-人-場所化』構文と『人-場所化-から』は専ら「対象の移動」に焦点があり、 Y_x は移動の起点であるのに対して、『人-から』構文は「対象の所有関係の変化」または「 Y_x から X_x への働きかけ」に焦点があり、 Y_x は対象の(元)所有者、または動作主である、という本研究の仮説は妥当性が高いと言えよう。また、本研究の仮説は、先行研究で文の他動性の強弱から図った一般化より、説明力が高い一般化であることも証明できたと思われる。

最後に、これら三つの構文と他の構文との関係に簡単に触れておきたい。

日本語の『人-から』構文は、(32a) (35a) のように Y_x を専ら動作主としてしか読み取れない例までくると、(37) (38) のような受身文の動作主用法と、ほとんど紙一重である。

- (32) a. 私は田中先生から英語を習った。
 (35) a. 太郎は親から虐待を受けた。
 (37) 私は田中先生から英語を教えられた。
 (38) 太郎は親から虐待された。

また、(22) (20b) のように、専ら対象の移動を表す他動詞・複合動詞を用いた『从-人-場所化』構文と『人-場所化-から』構文も、(39) のような“从”と「から」を用いた移動自動詞文と連続していると言えよう。

- (22) 我 从 婆婆 那儿 拿来了 一块 抹布。
 私 FROM 婆さん あそこ 持つ-来る-PERF 一枚 布巾
 (20) b. 私は婆さんのところから布巾を持ってきた。
 (39) a. 从 婆婆 那儿 来了 一个人。
 FROM 婆さん あそこ 来る-PERF 一人
 b. 婆さんのところから人がやって来た。

このように、意味機能が本質的に異なる『人-から』構文と、『从-人-場所化』構文・『人-場所化-から』構文は、それぞれ「から」の動作主受身文と、“从”と「から」の移動自動詞文と連続していることが確認できた。

6. まとめと今後の課題

本研究では、日本語も中国語も、移動の物理的起点が「人」である場合は、「人」を「の

ところ“那儿（あそこ）”などで場所化するのが普通である一方、取得動詞を述語にとる場合、中国語と日本語は「人」を場所化するか否かで違いが見られることに焦点を当て、そのような「人の場所化」の有無の違いが、構文の意味機能にどう反映されるのかについて考察を行った。「起点」「所有者」「動作主」という三つの概念がしっかりとした意味拡張の基盤を持つことを踏まえた上で、『从-人-場所化』構文と『人-場所化-から』構文は専ら「対象の移動」に焦点があり、「人」を移動の起点として捉えているのに対して、『人-から』構文は「対象の所有関係の変化」及び「主語への働きかけ」に焦点があり、「人」は対象の（元）所有者、または動作主として捉えられていると結論付け、このように考えることで、両構文の守備範囲の違いも過不足なく説明できることも確認できた（表1を参照）。

表1 まとめ

	意味機能	Y _A =起点	Y _A =起点+所有者/動作主		Y _A =所有者/動作主
			「盗む」「借りる」	「預かる」	
『从-人-場所化』構文	対象の移動に焦点がある	○	○	×	×
『人-場所化-から』構文	対象の移動に焦点がある	○	△	×	×
『人-から』構文	対象の所有関係の変化、または主語への働きかけに焦点がある	×	○	○	○

今後は、Y_Aを場所化する日本語の『人-場所化-から』構文の適用範囲の狭さを動機づける他の要因も考慮に入れて分析を行いたい。また、日本語も中国語も、取得動作の相手を起点標識だけでなく、着点標識（日本語は「に」、中国語は着点方向を示す前置詞“向”）でもマークできるが、両言語の共通性と相違点を考察する必要がある。更に、中国語は、取得動詞の一部に関しては、二重目的語構文を用いることもできる。起点標識“从”や着点標識“向”を用いる場合との意味機能の違いを考察する必要もあると思われる。

参考文献

荒川清秀（1984）「中国語の場所語・場所表現」『愛知大学外国語研究室報』 8:1-14.

- Hopper, Paul. J & Sandra A. Thompson (1980) Transitivity in Grammar and Discourse. *Language* 56(2): 251-299.
- 池上嘉彦 (1981) 『「する」と「なる」の言語学—言語と文化のタイポロジーへの試論』
東京：大修館書店.
- 池上嘉彦 (1994) 「<移動>のスキーマと<行為>のスキーマ—日本語の「ヲ格+移動動詞」
構造の類型論的考察」『外国語学研究紀要 英語研究室論集』41：34-53.
- Lakoff, G. & M. Johnson (1980) *Metaphors We Live By*. Chicago: The University of Chicago Press.
- 榎山洋介 (2014) 『日本語研究のための認知言語学』東京：研究社.
- Pinker, Steven (1994) How could a child use verb syntax to learn verb semantics? *Lingua* 92:377-410.
- 王軼群 (2009) 『空間表現の日中対照研究』東京：くろしお出版.
- 田窪行則 (1984) 「現代日本語の「場所」を表す名詞類について」『日本語・日本文化』12：89-115.

“The Localization of Persons” in Chinese and Japanese: “Source”, “Possessor”, and “Agent”

Ruoxi Zheng
madelinecici@gmail.com

Keywords: Localization, Person, Source, Possessor, Agent

Abstract

It is well known that both Chinese and Japanese “localize” persons functioning as the source of physical motion in the sense that nominals referring to persons acting in that capacity are most likely to be accompanied by “notokoro” or “那儿”. If the predicate verb means “taking or receiving”, there is a marked contrast between the two languages: while the localization of persons serving as sources is obligatory in Chinese, Japanese prefers to leave those persons serving as sources unlocalized. This paper is intended to show how this contrast is related to the different ways the Chinese and Japanese constructions construe the same event. After carefully examining the problems with a previous study based on transitivity, I emphasize the importance of the metaphorical semantic relationship among source, possessor and agent. I propose that the Chinese construction with a localized person focuses on “the object’s motion”, with the localized person merely designating the source of motion. In contrast, the focus of the Japanese construction with an unlocalized person is either on “the transfer of possession” or on “one person’s action performed on another”, with the person in question viewed as the possessor or the agent. (てい・じゃくぎ 東京大学大学院)